

複合的な一人称の語りと物語の信憑性 ルイーズ・アードリックの『鳩害』

著者	余田 真也
著者別名	Shinya Yoden
雑誌名	白山英米文学
巻	45
ページ	35-53
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011959/

複合的な一人称の語りと物語の信憑性

——ルイズ・アードリックの『鳩害』——

余 田 真 也

1. 複合的な語りの信憑性

アメリカ先住民オジブウェ族の現代作家ルイズ・アードリック (Louise Erdrich, 1954-) は、帰属するタートルマウンテン・バンドの保留地での生活経験こそないものの、オジブウェ語の習得に努めながら、自身の出自や居住地と関連する作品を精力的に書き継ぎ、主流の文学界でも先住民の文学界でも高い評価を受けている。またミネアポリスに独立系書店 (Birchbark Books) を所有し、先住民関連の書籍販売や出版事業を通じて先住民社会にも貢献している。先輩作家 N・スコット・ママディ (N. Scott Momaday) などと同様に、アードリック自身は先住民作家という分類を必ずしも好んでいないとしても (Wong 31, White and Burnside 111)、あるいはまた親族の出身地であるタートルマウンテン保留地には、私的な事柄を断りなしに小説に利用されたことを快く思っていない部族民がいるとしても、先住民作家としてのアードリックに対する信用が揺らぐことはないだろう。だからこそ、彼女が作品においてしばしば語りの信憑性を主題化していることは興味深い。

全米批評家協会賞に輝いた最初の小説『ラヴ・メディスン』 (Love Medicine, 1984) 以来、アードリックの小説を特徴づけているのは、複数の語りや視点を構造化して断片的な物語を積み重ね、作中の人物や出来事や歴史を多角的に浮かびあがらせるという手法だろう。しばしばウィリアム・フォークナー (William Faulkner) のヨクナパトーフア・サガとも比較されるように、アードリックの物語作法は、先住民的というよりもモダニズム的だが、それは作品世界を伝承の集積のように描きだしながら、その表象に文学的な真実味を醸し出すための手段だと考えられる。

たとえば『ラヴ・メディスン』では、スキャンダラスなオジブウェ女性ルル・ナナプッシュ・ラマルティン (Lulu Nanapush Lamartine) をめぐる関係者たちの一人称の語り (妻を棄ててルルを選んだネクター [Nector] の語りや、夫ネクターを奪われたマリー [Marie] の語り) および三人称の語りや、ルルの人物像を多角的に映し出す一方で、ルル自身の語りは彼女の人物像をさらに相対

化する。また、ひとつの出来事が複数の作品において異なる観点から紡がれる事例も枚挙にいとまがない。たとえば混血女性ジューン・キャシュポー (June Kashpaw) が凍死するまでの経緯について、『ラヴ・メティスン』の最初の章 (“The World’s Greatest Fisherman”) では、姪にあたるアルバティン (Albertine) が親族から聞き集めた話を語っているが、別の小説『灼熱の愛の物語』 (*Tales of Burning Love*, 1997) の最初の章 (“Easter Snow”) では、三人称の語りで、ジューンが最後に過ごした混血男性ジャック・マウザー (Jack Mauser) の視点から描かれている。

複合的な語りが織りなすポリフォニックな物語様式によって、アードリックは共同体の過去と現在を多彩に切り結び、保留地内外の複雑な人間模様や、先住民と白人の多様な関係性を照らしだしている。しかしその一方で、しばしば指摘されるように、複合的な語りによって紡がれる作品、とりわけ複数の一人称の語りが多くを占める作品においては、物語を統御する語り手や特権的な役割を担う人物が登場せず、個々の語りの信憑性が相対的に割り引かれる傾向がある。たとえば先住民文学研究者ジョン・ギャンバーによれば、アードリックの「多声的で総体的な物語 (“a multi-vocal total narrative”）」においては、作中人物の誰ひとりとして「物語の総体 (“the totality of the story”）」を把握することも、管理することもできない (Gamber 141)。「物語の多くが相互に少しずつずれていたり、あからさまに矛盾したりしている (“many of the narratives subtly differ, or even overtly contradict one another”）」ので、語りの信憑性に揺らぎが生じる (Gamber 142)。別の研究者デボラ・マッドセンの見解によれば、「信用できない一人称の語り手たち (“unreliable first-person narrators”）」が織りなす「アードリック小説の多声性は、真実や権威が不変の絶対として存在するという考え方に抵抗を示している (“the multi-vocality of Erdrich’s fiction resists the notion that truth and authority can exist as fixed absolutes”）」のである (Madsen 13)。

以上の文脈をふまえ、本稿ではアードリックが2008年に上梓した小説 *The Plague of Doves* (以下『鳩害』) を狙上に載せる。ノースダコタ州の架空の保留地と隣接する架空の町プルートー (Pluto) を主な舞台にして、先住民をめぐる不正や正義のありようを掘りさげる「正義三部作 (“Justice Trilogy”）」の最初を飾る本作は、人種主義や文化的多様性への理解の増進に寄与する作品に贈られるアニスフィールド・ウルフ図書賞に輝き、ピューリッツァ賞フィクション部門の最終候補にも選出された。本作の書評も好意的なものが多く、たとえば辛口書評家のミチコ・カクタニは、本作を「多角的に展開する合唱のような物語 (“a choral story that unfolds from multiple perspectives”）」に喩えながら、い

ささか唐突な逸脱はあるものの、いくつもの伏線や主題を見事に組織化する「交響曲のような共同体の描写（“a symphonic portrait of a community”）」を讃えて、既刊のアドリック小説のなかでもっとも野心的かつ感動的な作品だと評している（Kakutani）。本作は短いプロローグを除いて全編が4人の作中人物の語りで紡がれており、複合的な一人称の語りの特性がもっとも顕著に現れる作品といえる。以下、アドリックがどのように語りの信憑性を主題化し、複合的な語りの様式と先住民に対する不正の物語をいかに調停しているのかを検証する。

2. 『鳩害』の構成

アドリックは小説デビューから2005年まで、タートルマウンテン保留地をモデルにした架空の保留地リトル・ノー・ホース（Little No Horse）と隣接する架空の町アーガス（Argus）を主な舞台にして「リトル・ノー・ホース・サガ」と呼ばれる連作を断続的に書き継いでいた。そのほとんどの作品で複合的な語りを採用しているが、その構成は作品ごとに異なる。たとえば『ラヴ・メディスン』、『ビート・クイーン』（*The Beet Queen*, 1986）、『灼熱の愛の物語』は、多数の作中人物による一人称の語りと三人称の語り が混在している。『轍』（*Tracks*, 1988）は二人の人物がそれぞれ一人称で伝説的な先住民女性（Fleur Pillager）に関する語りを展開する。『ビンゴ・パレス』（*The Bingo Palace*, 1994）は全体の約三分の一がリプシャ・モリッシー（Lipsha Morrissey）の語り で、残りは三人称の語り が占めている。『リトル・ノー・ホースの奇跡に関する最終報告』（*The Last Report on the Miracles at Little No Horse*, 2001）はほぼ全編を三人称の語り が占めているが、『四つの魂』（*Four Souls*, 2004）は全編が三人の主要人物による一人称の語り で構成されている。『化粧太鼓』（*The Painted Drum*, 2005）は大部分が三人称の語り で、残りは二人の人物による一人称の語り になっている。『連作』には含まれない作品でも、『アンテロープ・ワイフ』（*The Antelope Wife*, 1998）は主に二人の主要人物を中心にした一人称の語り と三人称の語り からなり、『影踏み』（*Shadow Tag*, 2010）は主人公（Irene America）の一人称語り と三人称の語り の組み合わせからなっている⁽¹⁾。

本稿が分析対象とする『鳩害』は4人の作中人物の語り で構成されるが、その中心には20世紀初頭に発生した二つの殺人事件がある。1911年にロクレン（Lochren）という白人農家の夫婦と3人の子供が殺される事件があり、その第一発見者となった4人のオジブウェ部族民のうち、13才の少年を含む3人が

冤罪に問われて報復リンチ殺人の犠牲になった。これは1897年にノースダコタで実際に起きた事件を脚色したものである⁽²⁾。

『鳩害』の冒頭には「独奏 (“Solo”)」と題された短いプロローグが置かれ、5人の殺害を終えた殺人者の様子が描写される。男は泣き叫ぶ乳児の傍らで、弾の詰まった銃を修理していたが、手を休めて蓄音機のレコードに針を落とすと、ヴァイオリンの独奏が流れだす。乳児は静かになり、それを3回くりかえすうちに眠りに落ちる。銃の修理を終えた男は立ちあがって、ゆりかごを見下ろし、ヴァイオリンの甘い音色が強さを増してきたときに銃を構えるのである。

The man repaired the gun so the bullet slid nicely into its chamber. He tried it several times, then rose and stood over the crib. The violin reached a crescendo of strange sweetness. He raised the gun. The odor of raw blood was all around him in the closed room. (1)

緊迫した状況を伝えるスリリングな冒頭である。この時点では、引用の最後の「生血の臭い (“odor of raw blood”)」が乳児のものか否かは不明だが、後にこの乳児は殺害されなかったことが判明する。

続く本編は八つの部分に分けられ、帰属も年齢も性別も異なる4人の作中人物が語り手となり、1965年から1970年代前半を物語現在として、語り手自身および親族の人生、保留地内外の人間関係、地域の歴史を語る。八つの章のうち三つの章は、オジブウェの少女エヴェリーナ・ハーブ (Evelina Harp) が語り手をつとめ、母方の祖父ムーシャム (Mooshum) の思春期まで遡りつつ、11歳 (1965年) から大学1年の終わり (1973年夏) までの彼女自身の人生を語る。(彼女が語る章には祖父ムーシャムの語りも含まれる。) 別の三つ章は、オジブウェ部族裁判所判事のアントン・バジル・クーツ (Antone Bazil Coutts) が担い、19世紀半ばのレッドリバー流域の開拓時代にまで遡りながら、1940年代から70年代までの自身の人生や地域社会の人間模様をふりかえる。(彼の語りにはエヴェリーナの祖父の弟シャメングァ [Shamengwa] の語りも含まれる。) また別の一章は農家出身の白人女性マーン・ウォルド (Mam Wolde) が語り手となり、混血先住民の夫との出会いから殺害にいたるまでの半生を語る。そして最終章はロクレン農場殺人事件の生存者コーデリア・ロクレン (Cordelia Lochren) が、自身の人生や地域の歴史をふりかえる。

なお、本作のタイトルは、1896年の春にノースダコタで発生した鳩害に由来している⁽³⁾。作品の第1章の冒頭には、異常発生した鳩が、農作物を食い荒

らし、住民の家屋に損害を与える様子が描かれ、鳩害の惨状を目の当たりにして、ムーシャムの異父兄にあたる先住民のカトリック司祭セヴェリン・ミルク (Severin Milk) が信徒を募って祈りの行進を行ったことが記されている。概ね史実に即して虚構化されたこの箇所は、同時代の生き証人としてのムーシャムが11歳の孫娘エヴェリーナに語った出来事の再話である。

3. エヴェリーナ・ハーブの語り

一人目の語り手エヴェリーナは、親密な家族（白人の父と混血オジブウェの母と兄と祖父）とともに保留地の公営住宅に暮らし、比較的快適で便利な生活を送っていた。母クレメンス (Clemence) は部族事務所に勤める熱心なカトリック信者で、白人の父エドワード (Edward) は学校の理科教師にして古い切手の収集家で、ブルトーの創設者で銀行家だったフランク・ハーブ (Frank Harp) の孫にあたる。兄のジョーゼフ (Joseph) は当時サラマンダーに夢中で、母方の祖父ムーシャム (本名セラフ・ミルク [Seraph Milk]) は、父方の叔母ネーヴ (Neve) に夢中だった。ムーシャムの弟シャメンギャは巧みなヴァイオリン奏者で、母の妹にあたる叔母ジェラルディン (Geraldine) は部族登録担当官を務め、保留地の外れにある古い実家に暮らしていた。エヴェリーナの曾祖父 (Joseph Milk) は実在のメティスの指導者ルイ・リエル (Louis Riel) の熱烈な支持者で、彼の家族を迎え入れ、兵士に食事を与え、ともに闘ったが、1885年のバトーシュの戦闘 (Battle of Batoche) の後、国境を越えてノースダコタにやってきた。ムーシャムをはじめミルク家の子孫はみなリエルの礼賛者だったという。

11歳 (1965年) の当時、エヴェリーナは祖父のムーシャムから彼の人生の転機となった時期のさまざまな物語を聞いていた。たとえば、先にあげたように鳩害が深刻さを増していた状況で、ムーシャムは司祭の見習いとして祈りの行進に加わっていたにもかかわらず、名前も知らぬ混血女性と運命的な出会いを果たし、職務を放棄してそのまま劇的な駆け落ちを敢行する。一夏のあいだ、バッドランドの荒野でなんとか生き延びていたところを、実在の名高いカウガール、マスタッシュ・モード (Mustache Maude) に救われて、彼女と夫 (Ott Black) の農場で6年暮らした。その間、運命の女性ジュネス (Junesse) と結婚し、やがて保留地に戻って割当地に家建てて、5人の子供を育てたという。

エヴェリーナ自身は、意中の少年コーウィン・ピース (Corwin Peace) への熱烈な思いを实らせる一方で、彼女たちが通うカトリックの学校に着任した教

師アニータ・バッケンドーフ（Sister Mary Anita Buckendorf）に対して同性愛的な思いを抱くようになっていた。この二人は奇しくも 1911 年の先住民リンチ事件を介してつながっていたことが後に判明する。つまりコーウィンが犠牲者と加害者の曾孫で、アニータは加害者の曾孫だった。口の重い祖父ムーシャムからエヴェリーナが聞きだした事件の顛末は以下の通りである。

リンチの犠牲になった 13 歳の少年ホーリー・トラック（Holy Track）は、母親が結核の療養のために施設に隔離されるので、大伯父のアシジナク（Asiginack）に預けられていた。アシジナクとホーリー・トラックは手製の籠を売り歩いてそこそこの収入を得ていたが、ある日ムーシャムと友人カスバート・ピース（Cuthbert Peace）が酒代を目当てに二人に同行していると、白人農民ロクレンの家から不吉な牛の鳴き声と乳児の泣き声が聞こえてくる。一家 5 人の殺人現場に一人残された乳児に牛の乳を飲ませて元の部屋に戻し、足跡を消して現場を離れ、名前を伏せて保安官に書き置きを届ける。その通知のおかげで乳児が救出された一方で、発見者となった 4 人の先住民は、なぜか名前を特定されて、報復に殺気だつ白人たちに捕らわれてしまう。彼らが処刑場所を探して移動しているあいだに他の男たちが加わり、白人農民ウォルドの家の庭先に見つけた大木の枝にムーシャムを除く 3 人が吊されることになる。

以上が事件のあらましだが、その後の母の証言で、エヴェリーナはムーシャムがリンチを逃れた理由を知る。彼の妻ジュネスがリンチの首謀者のひとりユージン・ワイルドストランド（Eugene Wildstrand）の娘だったので対象から外されたというのである。エヴェリーナは事件の詳細や不明な点についてムーシャムに尋ねるが、まともな返答は得られなかった。

月日は流れ、1972 年の秋にエヴェリーナはノースダコタ州立大学に入学し、実家を離れて寮生活を始める。自己破壊的な詩人に熱中したり、詩神アナイス・ニンの日記にならって日常の細部を芸術的に記録したり、ときには同じ大学に在籍していたコーウィンとともに羽目を外したりしながら、憧れのパリに行くための準備をしていたが、初めての夏季休暇に州立病院の精神科で助手として勤務しているうちに想定外の体験をする。患者として入院してきた二歳年上のフランス系の女性ノネット（Nonette）の話し相手をしているうちに、自身の同性愛指向に目覚め、突然ノネットが退院すると今度は引きこもりになってしまうのである。院内で療養中の彼女を見舞いに来たコーウィンが、持参したヴァイオリンを奏でると、その音色は彼女ばかりか他の患者たちにも不思議な効果を及ぼす。とりわけウォレン・ウォルド（Warren Wolde）という老人には甚大な影響があり、演奏の終盤にはくずおれ、その夜には息をひきとってしまう。

Warren slides down the wall, his head over his heart like he is taking the pledge. His head slumps down onto his chest. The rest of us sit back down, too. Calm rains upon us and a strange peace fills our stomachs and slows our hearts. The playing goes on in the most penetrating, lovely, endless way. I don't know how long it lasts. I don't know when or if it ever really ends. Warren has fallen over. A nurse plods over to check his pulse. (246)

この患者の急死は唐突だが、彼こそがロクレン農場殺人の真犯人だったことが最終章で明らかになる。

その後エヴェリーナはコーウィンの車で病院を出て故郷に戻り、修道院でアニータと再会したときに、昔のリンチ事件に関する意外な事実を知って衝撃を受ける。リンチを先導したワイルドストランドに惨劇の発見者のことをうっかり漏らしたのは、他ならぬムーシャムだったというのである。ムーシャムから事件の顛末を聞いたとき、彼は自分自身の責任や裏切りについてはいっさい触れていなかったが、エヴェリーナは祖父が漏洩したからこそ、処刑された3人は彼によそよそしい態度を示していたのであり、彼だけが縄を切られて生きながらえたのだと確信する。

Nowhere in Mooshum's telling of the events did he make himself responsible. He never said that he had been the one who betrayed the others, yet instantly I knew it was true. Here was why the others would not speak to him in the wagon. Here was the reason he was cut down before he died. (251)

処刑された少年が履いていたブーツをアニータから手渡されたエヴェリーナは、帰宅してムーシャムに詰め寄る。彼は首に縄をかけられたものの、死ぬ前に縄が切り落とされており、眼を醒ますとブーツが空中を歩いていたという“When I came to, I looked up and there was these damn boots with the damn crosses on, walking, the boy was still walking, on air” (252)。

ムーシャムから初めてリンチ殺人事件の顛末を聞いた後、エヴェリーナは血縁に取り憑かれ、誰のこともそれまでと同じようには見られなくなっていた——“The story Mooshum told us had its repercussions——the first being that I could not look at anyone in quite the same way anymore. I became obsessed with lineage” (86)。犠牲者ホーリー・トラックは、祖父ムーシャムの妻の従姉妹の息子であり、

他方、リンチを先導したユージーン・ワイルドストランドの娘はエヴェリーナの祖母であり、またバッケンドーフの孫アニータはエヴェリーナの学校の教師だった。エヴェリーナの初恋の相手コーウィン・ピースは、リンチの犠牲者カスパート・ピースの子孫である一方で、ユージーン・ワイルドストランドの子孫でもあり、エヴェリーナの遠縁でもあった。そして今エヴェリーナの祖父は、命の危険にさらされた犠牲者である一方で、加害者に情報を漏洩してリンチを誘発していたことが判明したのである。

ムーシャムはリンチ事件に限らず他の話題でも話を脚色して真相を隠していた。たとえば彼の耳朶の上部が欠けている理由をキャシディ神父から尋ねられるたびに彼は異なる答えを返していたのだが、あるとき伝説の「肝食いジョンソン」(Liver-Eating Johnson) と闘ったときの傷だと騙り、血みどろの鬨いで切り取ったという鼻を見せる。彼を邪教徒呼ばわりする神父に対して、ムーシャムはキリスト教の聖遺物や正餐式との比較をしてみせる。冒瀆的な比較に立腹した神父は憤然と席を立つが、屋外に出たところでサラマンダーを踏んで転倒する(37-41)。トリックスター的な役割を担うムーシャムの面目躍如といった逸話だが、耳朶の欠如については、ムーシャムは家族にさえ嘘をついて鳩害のときに鳩に啄まれた痕だと語っていたようだ。真相は初めて狩りに出かけた弟シャメングワを熊に変装して驚かせるという悪戯をしかけたときに、弟の発砲した銃弾が耳を掠めた傷らしい。

エヴェリーナは祖父が語り聞かせてくれた昔話には粉飾が施されていることに気づいていたが——“if there was embellishment, it only had to do with facts” (19)、リンチ事件に関しては、たんに事実を粉飾してただけではなく重大な事実を隠蔽していた。ムーシャムは罪の重さを自覚していたからこそ、己の軽率さが仲間3人の処刑を招いたという事実を誰にも話せなかったのだろうが、その隠蔽は彼の自分語りや信憑性に欠けることを端的に証している。ムーシャムの隠蔽を暴いたエヴェリーナの語りは、いわば語りの信憑性を測る機能を備えているわけだが、エヴェリーナの語りのかかなりの部分がムーシャムの語りを継承しているため、彼女の語りも信憑性の問題を引き継いでいることになる。そもそも11歳のときの彼女の記憶を全面的に信用することは難しい。

4. アントン・バジル・クーツ判事の語り

二人目の語り手クーツ判事も混血のオジブウェで、弁護士を経て1970年代の現在は部族裁判所の判事を務めている。長らく同居していたオジブウェの老

母は、クーツがジェラルディンと結婚する少し前から高齢者用共同住宅に入居している。クーツ判事の父も祖父も法律家だったが、祖父（Joseph）は弁護士になる前に、未開拓だったレッドリバー流域の平原地帯の探検に携わったことがある。その探検の案内人を務めたのは、巧みなフィドル奏者であるメティスのピース兄弟、アンリ（Henri）とラファイエット（Lafayette）で、二人は後のリンチ事件の犠牲者カスパートの兄にあたる。探検隊の他のメンバーのバッケンドーフ兄弟は後のリンチ殺人の首謀者である。ジョーゼフは彼らとともに、未開の大平原で暴風雪や雪解け水や食糧難に遭遇し、何度も命の危険に晒されながら目的地に辿りつき、わずかばかりの土地の証書を手に入れ、その後、弁護士資格を得て、開拓地のプルーターに移り住んで弁護士を務めた。彼の息子（クーツの父）も同じく法曹の道歩み、オジブウェ女性と結婚して、法律家にして部族メンバーになった。語り手クーツはプルーターにある祖父から引き継いだ土地に父が建てた大きな家で、母方の保留地の家族とともに育ち、曲折の後に法曹界に入ったのである。

クーツは部族判事になる前には弁護士を務めており、保留地内外の先住民と白人の双方の複雑な人間関係にも通じていた。たとえばクーツが弁護した白人のジョン・ワイルドストランド（リンチを主導したユージーン・ワイルドストランドの子孫）は、その当時、父親からプルーターの銀行を譲り受けたネーヴの夫だったが、先住民マギー・ピース（Maggie Peace）と不倫関係にあった。（二人のあいだに生まれたのが、エヴェリーナの初恋の相手コーウィンだった。）マギーの弟ビリー（Billy）に金を脅し取られそうになったジョンは、逆に妻ネーヴの偽装誘拐をビリーにもちかけ、身代金をだまし取ったが、偽装が発覚してネーヴから訴えられたのである。

判事としてのクーツは、法の番人である一方で、部族の人間関係や部族的な価値観に適った裁定も行っていた。たとえば、シャメングアは誰もが認める巧みなフィドル奏者だったが、ある日、大切なヴァイオリンを盗まれてひどく意気消沈していた。そのヴァイオリンを入手した経緯がとても神秘的なので、他のヴァイオリンでは代替できないからだ。シャメングアが最初に手にしたヴァイオリンは父親の所有物だった。彼が4歳のときに幼い弟がジフテリアで亡くなると、母親が長期にわたって喪に服し、父親もその影響を受けてヴァイオリンを戸棚にしまい込み、家庭はだんだんと陰鬱で厳格になっていった。兄弟たちは家を出て行き、シャメングアはひとり残されたが、両親が留守の間に父のヴァイオリンを見つけ、7年間も独力で密かに練習を重ねていた。しかし両親にそれを知られた翌日、父がヴァイオリンとともに失踪してしまう。数ヶ月の

あいだ母とともに大きな喪失をかみしめたあと、夢の声に導かれてある湖の畔に赴く。湖畔で寝泊まりしていると、目の前に無人のカヌーが現れ、そのなかにケース入りのヴァイオリンを見つけたのである（200-06）。

他方、小金ほしさにシャメンガアの大事な楽器を盗んだコーウィンは、逮捕されてクーツ判事の元に引き出される。彼は探検隊時代の祖父の命を救ったピース兄弟の子孫であるコーウィンを救済するために、「部族的な解決」が有効と判断して、シャメンガアの元での毎日3時間のヴァイオリン練習を約束させた。コーウィンは判事の期待以上に稽古に励み、やがてシャメンガアの葬儀では会衆の前で見事にシャンソンを演奏する。ヴァイオリンは故人と一緒に埋葬されるが、偶然にもそれが元々はピース兄弟の持ち物だったことが判明する。ピース兄弟のヴァイオリンがシャメンガアを経由してピースの子孫の手にわたっていたのである。クーツ判事に養子として迎え入れられたコーウィンは、後に旅回りのフィドル奏者となる。

物語現在時の年齢や社会的な地位からすれば、クーツ判事はもっとも信用のおける語り手である。たしかに彼自身が法律家として関与した出来事の回想や共同体の人間関係についての記述は客観的で良心的に思える。しかし、ロクレン農場の生存者コーデリアとの関係をめぐる彼の語りは必ずしも信用できるわけではない。

ジェラルディンとの新婚生活のさなか、クーツ判事は地域住民の誰もが知っている過去の恋愛事情を回想する。彼は17歳のときに年の離れた医師コーデリアと秘密の恋仲になり、同居していた母への言い訳のために、クリニックの隣にある墓地で働き始め、急死した雇い主の跡を継いで20歳で墓地の経営に携わる。コーデリアとの関係は5年続いたが、彼女は年齢差を理由に結婚を拒んでいた。彼女が建設業者のテッド（Ted Bursap）と結婚したのを機にクーツは司法試験の勉強を始めるが、彼女との関係は続いていた。コーデリアとの不倫関係を正当化するように、彼女と夫テッドの間には互いへの深い愛情も激しい情熱もなかったのだとクーツは考える。

He [Ted] did not love his wife the way I did; she had not saved his life, either — she had only fixed his hernia. They never had passion, she told me, although Ted was a patient man and treated her well. (281)

それに比べてクーツと彼女は、互いのすべてを分かち合っていたと自画自賛する。将来のことは話さなかったものの、充実した現在があれば十分だったのだ。

We were the main connection, the one who saw and understood. I told C. [Cordelia] everything that was happening to me, from dreams to books I'd read to my mother's health, and C. did the same with me. We never talked about the future anymore — she refused to, and I had to accept that. The present was enough.... (282)

しかしそうしたクーツ判事の認識は、1ヶ月後のジェラルディンとの会話によって修正を余儀なくされる。コーデリアは先住民を診療しない医者として知られていたのである——“Geraldine then told me of several cases, over the years, where the doctor had turned people down—— even in a crisis—— and how she had let it be known, generally, that she would not treat our people” (292)。しかしクーツはまったく気づいていなかった。彼は他の誰よりも彼女を理解しているつもりだったが、そうではなかった——“I understood, then, that I'd known everything and nothing about the doctor” (292)。部族民にとって周知の事実を知らなかったことは、彼の心がどれほど保留地から離れていたかの証しでもあった——“And there I was, a member of our tribe —— which proved how off-reservation my mind-set was, growing up (291)。そしてクーツは次のように結論づける。先住民差別者のコーデリアにとって「唯一の例外」がクーツであり、したがって二人の関係は彼女にとっての「赦罪」だったのだ——“Even though she'd cured my head bumps, become my lover, I'd always be her one exception. Or worse, her absolution. Every time I touched her, she was forgiven” (292)。

クーツ判事の語りは、盲目的な恋情に溺れていた己の無思慮への自覚で終わっているものの、そもそも新婚の床で過去の恋愛事情を回想することがどれほど思慮を欠いているのかについて自問することはない。彼の無思慮はコーデリアとの関係を終息させた一因でもあった。クーツは母を老人ホームに入居させるために愛着のある実家を売る決心をしたが、有利な価格で売るのは難しかった。不承不承にデッドの会社に売ったことをコーデリアに伝えると、彼女は人目もはばからずに解体作業中のテッドの元に赴いて作業を止めようとする。妻とクーツの仲に気づいたテッドは、そのまま破壊を続けるが、ミツバチの巣を刺激したため二人は蜂の大群に襲われる。クーツはコーデリアを助けだす一方で、テッドは放置したまま壊れた蜂の巣の蜜を味わう。クーツの冷淡なふるまいを目のあたりにしたコーデリアは、テッドが回復するとその家の解体を認めるのである。

その後、クーツは司法試験に合格し、弁護士を経てインディアン法の専門家になり、保留地に戻ってジェラルディンと結婚する。ブルトーの実家の跡地にはテッドが新しい家を立てるはずだったが、1年後に彼はふたたび蜂に刺されて窒息死してしまったので、跡地は放置されて雑草が生い茂っていた。それを眺めていたクーツに老婦人となったコーデリアが話しかけてくる。クーツは彼女の容姿の変化にとまどいつつ、彼女に近づこうとするが、彼女は優しい表情を見せることもなく、踵を返してさっさと車に乗り込んで去っていった。

Staring into her face, I saw expressions — shame, defiance, maybe satisfaction — but no tenderness that I could recognize.

“You did what you did,” I said, at last.

“I had to so you’d leave.”

I took a step toward her, but she turned from me and stomped back to her car. I watched her drive off. (290)

別れから20年の時が経過したとはいえ、クーツはジェラルディンの表情を読むことも、彼女の真意を推し量ることもできなかったのである。

5. マーン・ウォルドの語りとコーデリア・ロクレンの語り

本作の主要な語り手であるエヴェリーナとクーツ判事の語りが完全には信用しきれなかったように、残る二人の白人女性の語りにも信憑性の問題がつきまとう。三人目の語り手マーン・ウォルドは、16歳のときに混血オジブウェの宗教家ビリー・ピースと出会い、彼に誘われて参加した集いで説教に感銘を受け、さらに自身の神秘的な能力にも目覚める。それから3年のあいだ彼とともに国内を放浪し、二人の子供を出産し、やがて保留地内の実家に戻る。マーンが両親の農場を手伝うかわらで、ビリーは説教を行い、カリスマ性を高め、家には信者が集うようになる。精神を患う叔父のウォレンを病院に入れ、両親を亡くした後もマーンは農場にとどまったが、ビリーは伝道の旅に出るようになる。夫が留守のあいだ、マーンを癒やしたのは、かつて南西部で譲り受けた二匹の毒蛇だった。しかしビリーが子供のしつけに厳しくなり、また家庭内暴力をエスカレートさせていくにつれて、マーンはビリーへの殺意を募らせ、やがてヘビの毒を集めて彼を殺害する。

子供と妻への家庭内暴力を激化させていく夫を毒殺するという行為は、世間の同情を誘う。だからこそクーツ判事の力を借りようとする彼女をムーシャムは助けようとする。しかし信憑性の観点からいえば、殺人者の告白をすべて鵜呑みにするわけにはいかないだろう。本作品においてマーンはビリー殺害の報いを受けることはないが、「正義三部作」の三作目にあたる小説『ラローズ』には、マーンに対する批判的な言明が記されている。ビリーの前妻の娘にあたる混血女性エマリン (Emmaline) は、異母妹ノーラ (Nola) の意地悪な性格が、殺人の罪を逃れた母親マーンに由来すると毒づいている——“Is there a bitch gene? . . . Because if there is, Emmaline went on, my sister [Nola] got it from her mother [Marn], who was renowned as a prime bitch” (*LaRose* 55)。彼らが暮らす小さな共同体には、飼っていた毒蛇でマーンがビリーを殺害したという記憶は残っていても、『鳩害』でマーン自身が語ったような事情は共有されていないかのようなのである。

四人目の語り手コーデリアは、ロクレン農場殺人事件の唯一の生存者で、事件当時は生後7ヶ月だったが、事件後に白人のホーク夫妻の養女となって愛情を受けて育ち、東部の大学で医学を修め、9年後にブルートー初の女性医師として帰郷し、殺人事件現場となった土地にクリニックを開業して地域社会に尽くした。クーツ判事との恋愛沙汰もすっかり昔話となった1970年代半ばの現在、医師の仕事から引退したコーデリアは、すっかり寂れてしまったブルートーの町の最後の歴史協会会長を務め、友人のネーヴとともに歴史協会を締めくくべく町の歴史の総括を試みている。

町史に残る凶悪事件の当事者であるコーデリアは、事件後の自らの歩みを三人称でふりかえりながら、医者としての彼女には、先住民を診察しないという大きな瑕疵があったことを認める。しかし先住民の診療を拒否したのは、頑迷な偏見のためではなく、一種の麻痺状態のためだと弁明する。彼女は先住民を目の前にすると自制が効かず、取り乱してしまうのである。

One thing shamed her, only, one specific paralysis. She was known to turn Indians away as patients; it was thought that she was a bigoted person. In truth, she experienced an unsteady weakness in their presence. It seemed beyond her control as was the other thing. (298)

続けて彼女にとって若すぎるクーツ青年を愛したことについても、彼の前では制御しがたい運命の力に感情に支配されていたと釈明している。

She loved someone far too young for herself, inappropriate in that other way, too, but in his presence her feelings gripped her with the force of unquestionable fate. Or a mad lapse, she now believes. (298)

クーツと彼以外の先住民に向けたコーデリアの正反対のふるまいに道理はない。そもそも人種差別とは理屈に合わない根深い偏見だが、コーデリアにとっては先住民に対する差別がもたらす恥辱よりも、クーツに対する恋情がもたらす歓喜の比重の方がはるかに大きかったのだろう。先の引用にあるように、物語現在の時点ではクーツとの情事を「血迷った思い違い (“mad lapse”）」と総括してはいるが、信憑性は乏しい。クーツとの関係を断つために結婚したものの寡婦になり、その後の恋人は同居を始める前に若い女性と結婚して移住したと吐露するコーデリアにとって、クーツとの年月はかけがえのないものだったはずである。

6. ポリフォニー小説における終わりの感覚

複合的な語りからなるアードリックの小説は、多様な声や視点が混じり合う「ポリフォニー小説」と評される一方で、語り手の多彩さにもかかわらず、彼らの口調にはよく似た響きを感じとれるという指摘がある。書評家のブルース・バーコットによれば、アードリック小説の語り手たちは「抑制が効いて落ち着いた声を共有しており」、作中人物たちの豊かな内面は「しばしば詩的な言語で表現される」という。

Two: although these narrators differ in age, perspective, gender, and disposition, they will share an uncannily similar voice, hushed and deeply observant. Erdrich's characters have rich inner lives, expressed in language that's often achingly poetic but can sometimes resemble a John Mayer lyric. (Barcott)

その指摘は『鳩害』にもあてはまる。たとえばエヴェリーナがコーウィンと初めてキスを交わした後の情感は、11歳よりもはるかに年長の語り手による自己省察へと抽象化されている。

I had expected to feel joy but instead felt a confusion of sorrow, or maybe fear, for

it seemed that my life was a hungry story and I its source, and with this kiss I had now begun to deliver myself into the words. (20)

あるいは次のような事例もある。3人のオジブウェ部族民が絞首刑に処される場面は、物語内の現実から言えば、ムーシャムの語りをエヴェリーナが再現しているはずだが、事件の当事者であるホーリー・トラックの視点に寄り添って描かれている。死の直前に彼を襲った恐怖が母親の声で和らぎ、彼は朦朧とした視界のかなたに移ろいゆく雲を見ているのである。

The boy was too light for death to give him an easy time of it. He slowly choked as he kicked air and spun. He heard it when Cuthbert, then his uncle, stopped singing and gurgling. Behind his shut eyes, he was seized by black fear, until he heard his mother say, *Open your eyes*, and he stared into the dusty blue. Then it was better. The little wisp of clouds, way up high, had resolved into wings and they swept across the sky now, faster and faster. (79)

類例は枚挙にいとまがないが、たしかにそれぞれの語り手の背後には作者の声あるいは全知の視点の存在がうかがえる。しかしそうした声や視点は絶対的でも支配的でもない。重要なのは、多彩な作中人物たちの語りが交差する本作品において、どの語り手も全面的には信頼できず、だれも特権的な位置にいないということだろう。

アードリックの関心は、語りの信憑性を主題化しながら、百年以上の時の経過のなかで、白人と先住民、犯罪者と被害者、正義と不正が分かちがたく結びつき、安易な類型化や単純化を寄せつけない共同体のリアリティを浮き彫りにすることにあるだろう。ただし、アードリックはポリフォニーの祝祭的な混沌ばかりではなく、偶然がもたらす終わりの感覚を最終章に用意している。

ブルートーの最後の歴史協会会長を務めるコーデリアの元に、奇遇にも、彼女の人生における最大の謎（家族を殺害した真犯人）の答えが舞い込んでくる。彼女はリンチ殺人が「不当な正義（“rough justice”）」であり、取り返しのつかない間違いだったことは承知していた。また事件直後に行方不明になって容疑者とみなされていた近所の少年（Tobek Hess）も犯人ではないと考えていた。というのも、コーデリアは子供の頃に小さく折りたたまれた紙幣を何度も見つけており、それを真犯人の贖罪行為と推測していたからである。そして今、彼女が20年前に治療したウォレン・ウォルドという農夫が州立病院で死亡し、

彼の弁護士から彼女の元に届けられた荷物のなかにも同じように折りたたまれた小額紙幣が詰まっていた。病院に問い合わせると、ピースという訪問者が弾いたヴァイオリンの音楽を聴いた夜にウォレンは死亡したという⁽⁴⁾。

真犯人の犯行の動機を知る術はもはやないとしても、その犯人が、リンチの犠牲になった先住民の子孫コーウィンのヴァイオリンの演奏を聞いて息絶えるという荒唐無稽な偶然とも因果応報の必然ともいえる顛末を知る唯一の人物が、ロクレン家の唯一の生存者であり、ブルトーの最後の歴史協会会長でもあるコーデリアなのは、物語上の理に適っている。つまり、それは物語の審美的な要請と倫理的な要請の両方を満たす処方である。アードリックは多様な声や視点が織りなす断片的で複雑な共同体の物語に最小限の終わりの感覚を付与するかのよう、偶然がもたらす因果応報の哲理をそっと刻みつけているのである。

[付記] 本研究は JSPS 科研費 (16K02511) の助成を受けたものである。

また本稿は日本英文学会関東支部第 17 回大会 (2019 年度夏季大会、6 月 15 日、於東洋大学) のシンポジウム「エスニシティとナラティブのポリテクス——信頼できない語りを中心に」での発表原稿に加筆補正を施したものである。

註

- (1) 複合的な語りはアードリックの物語作法においてもっとも顕著な特性といえるが、全編を三人称もしくは一人称の語りで統一した作品もあり、とくに今世紀以降は増加傾向にある。全編を三人称の語りで構成した作品には、アーガスを舞台にドイツ系の非先住民の世界を描く『熟練屠殺者たちの歌唱クラブ』(*The Master Butchers Singing Club*, 2003)、特別な才能を持つ少女を中心に 19 世紀中期のオジブウェー家の道行きを綴る 5 冊の児童書「バーチバーク連作」(*The Birchbark House* [1999], *The Game of Silence* [2005], *The Porcupine Year* [2008], *Chickadee* [2012], *Makoons* [2016])、さらに正義三部作の第三作『ラローズ』(*LaRose*, 2016) がある。全編を一人の人物が一人称で語る作品には、正義三部作の第二作『ラウンド・ハウス』(*The Round House*, 2012) や『生き神の未来の家』(*Future Home of the Living God*, 2017) がある。
- (2) 史実では 1897 年 2 月 17 日にノースダコタ州ウィノーナでスパイサー (Spicer) という白人農家 6 人が殺害され、5 人のダコタ部族民がその容疑

者として逮捕され、そのうち3人が死刑判決を受けたが、11月8日に州最高裁の裁定により証拠不十分として再審となった。しかし再審で無罪が確定することを確信した30～40人の市民が暴徒と化して、11月14日の夜にウィリアムズポート裁判所に収監されていた3人の容疑者を連れだして、牛の屠殺に使用する巻き揚げ機で絞殺刑に処した。農家殺人事件、容疑者の審理、リンチ事件に関する当時の報道は、それぞれ *James Town Weekly Alert* の記事 (“Horrible Details.” 25 Feb. 1897)、*Emmons County Record* の記事 (“First Trial Still Going.” 11 June 1897)、*Saint Paul Globe* の記事 (“Trio of Reds Swing Off.” 15 Nov. 1897) を参照した。またこの事件の歴史的な総括は Peter G. Beidler, *Murdering Indians* に詳しい。

事件の小説化にあたってアードリックは史実に多くの変更を加えている。たとえば事件の発生年や場所、殺された白人農家の名前や被害者の構成と数、容疑者の部族名や個人名や人数、容疑者に対する裁判、リンチの方法や場所や時間など。興味深い具体例をあげれば、史実としてのリンチ事件の犠牲者の一人 Paul Holy Truck の名前を小説でも Holy Truck として用いているが、年齢は19歳から13歳に設定している。作者の意図が推測できる変更ではあるが、ベイドラーによれば、これはアードリックの勘違いに起因している可能性がある。1920年にノースダコタ州のタートル・レイク近郊で発生したウルフ (Wolf) 一家殺人事件で巻き添えとなった13歳の少年 (Jacob Hofer) とホーリー・トラックを混同したかもしれないという (Beidler, “Imagined Places and Characters”)。しかし、ベイドラー自身も記しているように、スパイサー一家の事件では生存者はいなかったが、ウルフ一家の事件では揺りかごの乳児が唯一の生存者だった (Beidler, “Imagined Places and Characters”)。こうした文脈に鑑みれば、アードリックは二つの別の事件を組み合わせて虚構化したと解釈するのが妥当に思われる。

- (3) 1917年4月19日の *Courier Democrat* 紙の記事によれば、ノースダコタ州のラングドンには1871年にピークとなる蝗と鳩の害があった。蝗は秋に現れて年ごとに異なる地域で害をもたらした。鳩は春に現れて緑を食べ尽くした。鳩に対しては罟や銃や毒薬が使われたが効果は乏しく、数が増え続けたので、カトリックの神父たちは信徒を集めて行列を繰りだし、神に祈りを捧げた。すると不思議にも鳩は消え去ってしまったという (“Hunted Buffalo Here 50 Years Ago: The Story of Gregoire Monette, of Langdon, N.D.” *Courier Democrat*, 19 April 1917, p. 4, p. 8)。

- (4) ロクレン一家殺害事件の真犯人はコーディアの語りで明らかになるのだが、それ以前にも真犯人を示唆する伏線は張られていた。たとえば、エヴェリーナが州立病院でアルバイトをしていたとき、患者のウォレンはほとんど眠らず、独り言の最後はいつも「皆殺しだ (“I’ll slaughter them all”）」(228)という科白で終わると紹介されていた。また州立病院に入る前のウォレンが、夫ビリーに殺意を抱いていたマーンの心中を読みとるかのようには、“You’re gonna kill all.” (158) などとマーンに語りかけて、不気味な予言をしていた。

引証・参考資料

- Barcott, Bruce. “Rough Justice.” *New York Times Book Review*, 11 May 2008, www.nytimes.com/2008/05/11/books/review/Barcott-t.html.
- Barker, Debra K. S. “There Are No Burning Wagons, Beads, or Feathers in Louise Erdrich’s *The Plague of Doves*.” Hafen, pp. 229-244.
- Beidler, Peter G. *Murdering Indians: A Documentary History of the 1897 Killings That Inspired Louise Erdrich’s The Plague of Doves*. McFarland & Company, 2014.
- _____. “‘Imagined Places and Characters’: Louise Erdrich’s Recasting of *The Plague of Doves*.” www.petergbeidler.com/home/latest-projects/erdrich/.
- Beidler, Peter G and Gay Barton. *A Readers’s Guide to the Novels of Louise Erdrich*. Revised and expanded ed., U of Missouri P, 2006.
- Chavkin, Allan and Nancy Feyl Chavkin, editors. *Conversations with Louise Erdrich and Michael Dorris*. UP of Mississippi, 1994.
- _____. “An Interview with Louise Erdrich.” Chavkin, pp. 220-253.
- Erdrich, Louise. *Love Medicine*. New revised edition. 1993. Harper Perennial, 2009.
- _____. *LaRose*. 2016. Harper Perennial, 2017.
- _____. *The Plague of Doves*. 2008. Harper Perennial, 2009.
- _____. *The Round House*. 2012. Harper Perennial, 2013.
- _____. *Tales of Burning Love*. 1996. Harper Perennial, 2013.
- Feigel, Lara. “It Began with a Lynching.” *Guardian*, 18 May 2008, www.theguardian.com/books/2008/may/18/fiction.reviews.
- Gamber, John. “So, a Priest Walks into a Reservation Tragicomedy: Humor in *The Plague of Doves*.” Madsen, pp. 136-151, 170.
- Goldberg, Carole. “Channeling the Past: Vibrant Characters, Lyrical Prose Enchant in Louise Erdrich’s Latest.” *Houston Chronicle*, 11 May 2008, www.chron.com/life/books/article/

- The-Plague-of-Doves-by-Louise-Erdrich-1753474.php.
- Hafen, P. Jane, editor. *Critical Insights: Louise Erdrich*. Salem P, 2013.
- Huettl, Margaret. "Re/creating the Past: Anishinaabe History in the Novels of Louise Erdrich." Hafen, pp. 29-46.
- Kakutani, Michiko. "Unearthing Tangled Roots of a Town's Family Tree." *New York Times*, 29 April 2008, www.nytimes.com/2008/04/29/books/29kaku.html.
- Kurup, Seema. *Understanding Louise Erdrich*. U of South Carolina P, 2016.
- Madsen, Deborah L., editor. *Louise Erdrich: Tracks, The Last Report on the Miracles at Little No Horse, The Plague of Doves*. Continuum, 2011.
- _____. "Louise Erdrich: The Aesthetics of *Mino Bimaadiziwin*." Madsen, pp. 1-14.
- Messud, Claire. "Blood Relations." *New York Review of Books*, 17 July 2008.
- Stooky, Lorena L. *Louise Erdrich: A Critical Companion*. Greenwood P, 1999.
- White, Sharon and Glenda Burnside. "On Native Ground; An Interview with Louise Erdrich and Michael Dorris." Chavkin, pp. 105-114.
- Wong, Hertha D. "An Interview with Louise Erdrich and Michael Dorris." Chavkin, pp. 30-53.
- Wright, Gregory A. "The Work of Louise Erdrich; A Survey of Critical Responses." Hafen, pp. 47-67.